立川運輸グループ広報 2021年 2月号

埼玉県久喜市の交差点を右折していた乗用車が、横断中の高齢者をはねて死亡させる事故がありました。事故の現場は、信号のある交差点で乗用車の運転者は「フロントガラスが凍っていて見えづらかった」と話しています。事故の発生時間をみると、早朝のまだ暗い時刻でしたので、運転視界はヘッドライトが照らす範囲に限られていたと思います。それでも直線道路ならば、ヘッドライトは進行方向を照らしてくれますので、前方の危険はある程度視認することができます。ところが、交差点を右折する場合には、ライトは右側の進行方向を照らさないので、横断してくる歩行者がライトの死角に入り非常に見えづらい状態となります。そのうえにフロントガラスが凍っているのですから、横断してくる歩行者を見落とすのは必然のような気がします。

今の時期、早朝に運転する場合にはフロントガラスが凍っていることがあります。そういうときに、運転席の前だけをクリアにしてデフロスターをかけて「そのうちに解けるだろう」と運転する人がいますが、出かけるときはフロントガラス全部をクリアにして出かけてください。

短い手記なので、読んでみて下さい。

▽代償

「『取り返しがつかない』という言葉ですら表せない」。飲酒運転で死亡事故を起こして服役中の３０代男性が昨年１１月、刑務所内で記者のインタビューに応じた。服役して１年半が過ぎ、刑期を７割ほど終えた男性。事故時は２０代後半で、妻と子どもを持つ「ごく普通の会社員」だった。その日、外出先で酒を飲んだ。「酔いが覚めたら車で帰ろう」。そう考えて仮眠を取った後、慣れた道を運転し、高齢者の乗る自転車に追突し、逮捕された。「取り調べで、刑事さんから『落ち着いて聞いて』と言われ、相手の死亡を告げられた。とてもではないが、落ち着いて聞けるわけがなかった。

事故を起こさなければ関わることもなかったはずの人から、命をいきなり奪ってしまった」男性はその後釈放されたが、日常は一変した。事故の時刻になると目が覚めるように。「情けない話、何回も死のうと思った」。仕事を１カ月休職し、自宅に閉じこもった。復帰後も顧客に会うのは苦しかった。「接客業なので、本来はお客さんに名前を覚えてもらわなければならないが、事故のニュースで実名が出てからは知られるのが怖かった」。職場は電車で通える所へ異動した。

判決が確定し刑務所に入る時、けじめとして離婚し、今は毎週送ってくれる手紙が唯一の楽しみだ。子どもは小学生と幼稚園児。「僕が見ることのできない成長する姿が書かれている。上の子は事故のことを分かっているようだ。幼くても気付くものですね」

服役中に受けたプログラムでは、対面した別の事故の遺族から「殺人行為だ」と言われた。「加害者である限り言われて当然で、受け入れるしかない」と思う。遺族からは謝罪を拒絶されているが、出所したらまず、しっかり謝りたい。ただ、どんな方法が良いか考えあぐねている。事故前、酔いが覚めるのを待って車で帰ることがたびたびあった。「ばれなければ」「少しくらい」―。全て甘えだったと今なら分かる。「飲酒の他、携帯電話の操作やあおり運転の事故も聞く。起こしてからでは失うものが多過ぎる」。